

聴覚障害者の精神保健福祉を考える研修会 2022 Q&A

研修会後のアンケートで皆様からお寄せいただいた質問に、講師の皆様から回答をいただきました。可能な範囲での回答となりますことをご了承ください。

◇教育講演への質問

質問1

「精神疾患の自覚がない方（診断がついていないが、明らかな言動が見られる方）の受診に向けてのアプローチについて、こういった手法があるか（家族が支援を拒む場合に誰がキーパーソンとなるべきか）」

【回答】-金井浩一氏

制度サービス内で、それが出来るのか否かは度外視し、アプローチについてのみお答えいたします。今回私の講演の中でお話しさせていただいた事例を通じてお伝えしたことそのものがお答えとなるのではないかと思います。ひとまず「受診の促し」を目標とせず、ご本人の世界観（それが例え妄想的な内容、非現実的な内容であっても）を受容し、その中から本人が感じている困り感、生きづらさに着目し、それを支援するかかわりを重ねることだと思います。それを経て、信頼関係が構築された上で、その本人の困り感、生きづらさの軽減の手段のひとつとして「受診」の選択肢を提示し、本人に選んでいただくという順序が大切かと思っています。なお、「受診」の説明の中で受診することが本人にとってどんな得があるかという損得勘定にゆるやかに訴えかけるのもひとつの方法だと思います。家族が支援を拒んでいる場合も、拒否される中でも細くアプローチを継続しつつ、先述した本人へのアプローチと同じように、家族の世界観の中に含まれる困り感に寄り添いつつ、家族の信頼を得ることが先決になります。キーパーソンになることを拒まれる家族は多くおられます。しかしどうしても本人へアプローチする際には、倫理上家族もしくは親族はじめ本人の顔見知りの人につなげていただく必要は出てきますので、まずはキーパーソンになりえる人との信頼関係づくりからアプローチしていくということになるでしょうか。

質問2

「聴覚障害者に対して手話通訳保障の必要性について報告がありましたが、実践の中で円滑なやり取りもあれば、やりにくいまた課題とを感じる点があれば教えてください。」

【回答】-赤畑淳氏

緊急時のタイムリーな手話通訳派遣が難しいことは課題であるといえるでしょう。また、手話通訳者は毎回同じ人が派遣されてくるわけではないので、派遣団体内での的確な申し送り、情報共有は重要だと思います。

質問3

「現在、盲ろう者の方がお一人精神病院に入院されています。入院中も診察などで盲ろう通訳介助員の派遣ができると病院には伝えているのですが、全く依頼されません。病院に理解していただくためにどのように働きかけていけばよいのでしょうか。」

【回答】-赤畑淳氏

病院にいる精神保健福祉士を通して、相談してみることをお勧めします。また、病院側は通訳の必要性(重要性)について認識されていない可能性がありますので、可能であれば一度本人への面会の機会を作り、通訳者を交えて病院スタッフと話す機会を設けてみてはいかがでしょうか。すると、病院側も通訳者派遣のメリットを実感されることもあるかと思えます。

質問4

「退院準備のプログラムに手話通訳を付けるようなことは、どの位の病院で取り組まれていることなのでしょうか。どの病院なら情報保障が受けられるのかということは、今情報として集約されているのでしょうか。」

【回答】-森せい子

現状不明です。派遣元が把握していると思いますが、守秘義務等の課題があり、リサーチ意義のあるものだと思います。

質問5

「聴覚障害者の入院中の情報保障について、隔離病棟の場合でも手話通訳士が出向くことはあるのでしょうか？」

【回答】-森せい子

基本的に継続しての派遣は無いと思います。理由があり、病院が手配することはあると思いますが、実態は不明です。

質問6

「聴覚障害者相談員という職種ゆえに、多職種連携がなかなか難しいなと思うことが多くあります。講師の皆さんが、多職種へ連携をお願いしたいとき（特に腰の重い相手をお願いしたいとき）に、心がけていることを、教えてください。」

【回答】

①金井浩一氏

連携は「お願いすること」から始まり、同じ目標を持った平等で協働できるパートナーシップの関係性の中で起こると思います。大前提として連携チームの一員としてクライアント本人が入っているかどうかで、そのクライアントのニーズや望みが「同じ目標」となるように共感を得ることが大切だと思っています。お願いする時、「助けて欲しい」「わから

ない」をちゃんと相手に伝えること。たとえ機関として他機関にお願いする時も、「個人」としての思いをちゃんと「個人」に伝えること(アイ・メッセージで伝える)は大切にしています。観念的ではありますが、人を動かすものは「安心感」と「情熱」だと思っています。相手の「安心感」はお願いする者からの責任の表明、見通しと支援の意味の説明、リスペクト、そして「あなたと一緒にやりたい」という気持ちから生まれるのではないかと感じています。加えて、相手の立場を考えて依頼すること。相手が安心して活動できるベース、保証を用意してから依頼します。また、(言葉にするしないは別にして)相手にとっての報酬的利益を準備・想定しながらお願いすることも大事だと思えます。あと、暴走特急になってはいけません。が、「情熱」は理屈ではなく、こちらの「スピード」で伝わるものと考えています。つまり、「自分一人では何も出来ないという自覚」、「顔見知りのカード数」、「助けてと言われて今まで答えた数・経験」、「安心感をもたらす説明力」、そして「スピード」、この5点をもって連携する力に変えていくことかなと思っています。

②赤畑淳氏

多職種への連携依頼の時には、連携の目的、必要性、連携することによるメリットについて簡潔に伝えることを心がけていました。また、細かなことでも連絡・報告・相談を意識的にしていくこと、顔を合わせる機会があれば、業務として積極的に参加していました。

③眞崎翼氏

多職種に連携をお願いするとき心がけていることは、「丁寧に対応すること」と「めげずに連絡をする」ということです。基本的なことかもしれませんが、相手が腰の重い時ほど思う通りにいかず、感情的になってしまったり、連絡が億劫になったりすることがあります。そういった場合、アプローチの方法を検討し、例えば、連携をお願いしている相手と1対1でやり取りをするのではなく、関係者会議などを開き、色々な意見を取り入れるなど工夫しながら連携することを意識しています。

◇教実践報告への質問

質問7

「拘束をするからこそ身体を守っている面もあるのでしょうか？医療現場の説明があったならば、詳しく教えてください。」

【回答】-森せい子

ほとんどのケースで言われたのが「言うことを聞かない、勝手に動く、点滴をとってしまう、暴れるので」です。入院患者(拘束される人)の安全というよりは周囲への影響と治療しやすくするためという感じです。おそらく「言葉」が伝わってないと思われました。

質問8

「施設に入られて、「しあわせだった」と言われる方がどのぐらいの割合でいらっしゃいますか？」

【回答】-川満和則氏

ふくろうの郷が他の多くの老人ホームと異なる点は、震災を経験した当事者であるろうあ者が自分たちが入る施設の為に、建設資金をかき集めて作られたという点です。一般的に特別養護老人ホームに自ら入りたいという高齢者は多くないと考えられます。しかしふくろうの郷の入居者(ろうあ者)は、自分が入るために建てた念願のホームに自らの意思で入居をしています。また他の例でも、精神科病院でよく大声を出していた方が、ふくろうの郷に来てからは落ち着かれるようになって、後見人からお礼を言われたこともありました。その他、家族から「幸せそうな様子で良かった」との声も多数頂いています。入居者のひとり一人に「あなたは幸せですか」と尋ねて集計したことはありませんが、入居者がいきいきと生活している様子を見れば、幸せかそうでないか、どのような思いで暮らしているか考える事が出来るので、是非コロナ禍が収まったら実際に見にお越し下さい。

参加者アンケートの中で寄せられた質問と、講師や発表者の皆様からいただいた回答をそのまま掲載いたしました。

今後の皆様の支援に役立てば幸いです。

なお、アンケートは終了しており、今後のご質問は受け付けておりませんのでご了承ください